

「勘と経験」がない。だからこそ「データと技術」を信じた

気合いを入れて臨んだ初めての農作業。しかし、最初の「畦（あぜ）塗り」作業で、トラクターをまっすぐ走らせることができず、すぐに壁にぶつかりました。

「最初が曲がると、その後の作業もすべて曲がってしまう。どうすればいいか悩んだ末にインターネットで見つけたのが、トラクターの『直進アシストシステム』でした」

これを機に、鈴木さんは最新技術である「スマート農業」へ大きく舵を切ります。農業歴何十年というベテラン農家が持つ「長年の勘と経験」は、自分にはありません。「だったら、データと機械の力を借りるしかない」と腹を括ったのです。

国の補助制度なども活用し、県内でもいち早く最新の「ロボット田植機」を導入。RTK-GNSS※で田んぼの形状を記憶し、自動運転で正確に苗を植え付けるこの機械は、ただ作業が楽になるだけではありませんでした。

「手動で植えるとどうしても苗の間隔が重なってしまう部分ができ、そこに肥料が偏って稲が倒れる原因になります。しかし、ロボットなら均等に正確に植えられる。結果的に肥料の無駄がなくなり、収穫量の大幅な増加に直結したんです」

さらに、生育途中の肥料散布にはドローンを活用。AIが気象データから最適な追肥の時期を予測してくれるため、毎日田んぼを観察する経験がなくても、ベストなタイミングで肥料を与えることが可能になりました。

※RTK-GNSSとはスマートフォンなどで使われる一般的なGPSが数メートルほどの誤差が生じるのに対し、人工衛星からの電波に加えて地上の基準局からの補正データを受信することで、誤差を数センチ単位にまで抑え、極めて高い精度で位置情報を取得できる技術です。

サラリーマンから農家へ。自分の努力が直結する面白さ

前職はガス会社の営業マンとして、毎日何十件も個人宅を訪問していた鈴木さん。当時の経験は、農家となった今も大きく活きていると語ります。

「農業経営で社会と関わる中で、営業時代に培ったコミュニケーション能力や社会人としての経験は間違いなく私の武器になっています。それに、会社員時代は頑張っても給料への反映はわずかでしたが、農業は違います。自分が学んで工夫し、規模を拡大した分だけ、収入や結果としてダイレクトに返ってくる。すべて自分の責任だからこその『面白さ』が農業にはありますね」

現在では、幼なじみの同級生を右腕として雇用。彼もまた農業未経験からのスタートでしたが、スマート農業機械を活用することで、今ではベテラン農家にも劣らない作業をこなせるまでに成長しています。



稲刈り機内のメーターで米の状態を瞬時に測定



ドローンの追肥の進捗状況をスマホで確認

相棒と共に、下妻の農地を未来へつなぐ



データに基づく的確なアプローチを続けた結果、鈴木さんは地域平均を大きく上回る収穫量を達成。令和7年には「飼料用米多収日本一」コンテストで、関東農政局長賞を受賞しました。

「この受賞は決して自分一人の力ではありません。立派な経営基盤を残してくれた義父をはじめ、未経験の私を指導してくださった親戚や近隣の農家さん、生産組合の先輩方、支援してくれた関係者の皆様のおかげです。皆様に教えてもらい、お世話になったからこそ今の自分があると感じています」と、鈴木さんは感謝を口にします。

そして「農家の高齢化が進む中、将来的には地域の耕作放棄地なども引き受け、規模拡大を目指したい。お世話になった皆様への恩返しとして、草に覆われる農地を一つでも減らし、下妻の美しい田園風景を未来に残していきたい」と、これからの目標を語ってくれました。

未経験という逆境を、「スマート農業」という相棒と地域の支えと共に乗り越えたその背中は、これからの下妻市の農業の未来を明るく照らしています。

Profile



すずき　ひでふみ
鈴木　秀史 さん（43歳・坂井在住）

龍ケ崎市出身。ガス会社勤務を経て、令和2年に就農。現在、約50ヘクタールの農地で主食用米や飼料用米を栽培。また、地域の生産組合では副組合長を務め、ブロックローテーションによる小麦とそばの栽培にも取り組む。ロボット田植機やドローンなどのスマート農業機械を駆使し、未経験からのスタートながら労力削減と経営規模の拡大を実現。令和7年には「飼料用米多収日本一」コンテストにおいて関東農政局長賞を受賞。今後も地域の農地を守りながら、さらなる規模拡大をめざし意欲的に農業に向き合っている。